
終わりに続く始まり

ルーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりに続く始まり

【Nコード】

N5146G

【作者名】

ルーツ

【あらすじ】

死とは終わりであると思っていた。ただどぼくは死んで思い知る。死は終わりではなく、終わりは終わりでない。これは終わったはずの存在が続きを与えられたモノの物語。

プロローグ 終わりで始まる物語（前書き）

初めましてルーツです。

前作から内容を大幅に改変しました。申し訳ありません。

オリ主、オリキャラ、オリ設定が出ますが、許容できる人はお読みください。

感想をお待ちしております。

ブローグ 終わりで始まる物語

生まれれば始まり。

死ねば終わり。

今までぼくはそう思っていた。

だから自身の危機を感じるようなことはしなかったし、健康管理にも気をつけて生きてきた。

それは自分を可愛がってくれた祖父や祖母が死んだ時に感じたのかもしれないし、もしかすると二ユースで痴情の纏れなどで死んだ人を見た時に感じたことだったのかもしれない。

『死』は終わり。

事実、そうなのだろう。

死んで動けるものなど空想にしか存在しないリビングデッド、ゾンビというやつや、非科学的な幽霊という存在のみである。
だからぼくは知ることはなかった。

『死』が、終わりと、“始まり”も司どるということに。

だからぼくは知ることとなる。

『死』が始まりを含む事象だということを。

この身で実感することとなる。

そう、この日。ぼくは死んだ。

朝露が葉々を濡らす、陽が昇りきらない夜の明ける少し前。

我が在籍校、魔帆良学園で“世界樹”と呼ばれる標高ウン百メートルの名前負けしない大樹の根元で、ぼくこと『北條彼方^{ほっしょうかなた}』は横になっ
っていた。

見上げる夜空はすでに明らみ、先程まで夜のカーテンで燦々と輝いていたお星様も今や退散を初めていおり、代わりに全体の二割ほどの姿を地平線の彼方から現し始めている太陽の欠片を見つめながらぼくはセンチメンタルな気分になる。

まだ冬特有の寒空の中、身体から流れ出る液体が冬の寒さと相乗して多くの体温を奪い去る。

十七年間、重い病氣も酷い怪我也せず共に生きてきた身体から生命の雫が漏れ落ち、自身を包む小さな泉となっている。

だんだんと身体に力が入らなくなっていく。性格には力が抜け落ちていく感じがする。

原因などはとづくにわかっている。

腹部に空けられた拳二つ分の大きな穴。

溢れ出す雫はそこから流れたものだ。まったく、今生きてられるのも奇跡に近いということがこの出血量から窺える。

痛みというものはもう感じてなどいなかった。言うなら、痛みを感じる余裕など、とうに過ぎていた。

体が冷える。まるで極寒の地にもいるようだ。

こんな時は走馬灯が頭を過るというが、そんなこともなかったので自分で特に何もない平凡な人生について振り返ってみる。

四人家族の長男に生まれ、サラリーマンの父親と超敏腕OLの母、三つ下の少しブラコン気味の妹が一人のごくごく平均平凡な四人家族。

別に家族のことは好きでも嫌いでもないのだが、もう会えないと思うとなんだか少し、少しだけ、胸に風が吹いた。

もうすでに致死量以上の血が流れ、意識に靄が掛かっている状況でも比較的冷静に自分の状態を見れていることにぼくは結構驚いた。

何気に肝っ玉はふんぞり返ってるらしい。ぼく自身はおとなしく気弱な人間だと自負しているというのに。

そんなどうでもいいことを考えているうちに、とうとうぼくにもお迎えが来たようだ。

体が暖かなものに包まれる。さっきまでここは極寒かと思っていたのが嘘のような暖かさ。

まるで幼き頃に受けた母からの抱擁。

自分の記憶で唯一覚えているたった一度っきりの母の抱擁を、この感覚に重ねて思い出した。

「これはもう重症だなあ……」

ポツリと、声が漏れた。

重傷だけど、と人生最後になるであろう洒落を言ってみた。

くくく、下らないが、死ぬ前の言葉としては上出来じゃないか。

視界の靄がより濃くなった。そろそろか、という時にあることを思い出す。

自分の腹を穿ち、抉った“あいつ”の存在。

何も死ぬ間際に思い出さなくても……こっいつ時は普通大事な人を思い出すもんでしょくに。
つくづく間の悪い。

あいつとの短い会話の内容を思い出す。天使だの悪魔だの魔法だの

世界樹だのとなんともファンタジーな話をしてくれたあいつ。

まあ今となつては信じざるを得ないといったところか。何しろその『魔法』でぼくの腹をぶち破ったのだから。

変態度バリバリの姿を見た時にすぐに逃げ出せば良かった。逃げきれたかどうかは別にして。

ああ、目蓋が重い。

目蓋ってこんなに重いものだったんだ。

この世ともお別れか。

寂しいのか淋しいのか、いやどちらも違うな。

——悔しいんだ。

今まで終わりを避してきたぼくが、回避できなかった『死』に。

打ち破ることの出来なかった事象に。

だがそれももう終わり。

何故ならこれが“終わり”なのだから。

「ああ、悔しいなあ」

半開きの目蓋から覗くのは七割の青い空。

半分の太陽。

己の学舎。

そして世界樹。

目蓋が完全に閉じる寸前、世界樹が淡く発光したような………そんな気がした。

「今夜は星が綺麗だな」

「そうだな」

今日は週に二回ある夜警の日。

私、『龍宮真名』と一緒に仕事を組んでいるクラスメイト兼パートナーの『桜咲刹那』と共に学園の見回りを行っていた。

魔帆良学園は関東魔法協会の本部でもある。それだけではなくここには世界樹、『神木・蟠桃』という霊脈、地脈を集さざる基点のある場所である。それゆえ関東魔法協会を敵と認識している組織から魔帆良学園は襲撃を受けやすい。

普通はこの学園に在籍する魔法先生や魔法生徒が主にここの防衛をしているのだが、あまり人手が足りないので私のような傭兵も雇っている。刹那の場合は護衛対象がこの学園にいるので自主的に参加をしているだという。

そんなこんなで私たちの今日の担当地域は世界樹が聳え立つ広場方面。

最も狙われやすい地点ではあるが、報酬のこともある。せいぜい頑張るとしようか。

あれからかなりの時間が流れた。その間中私たちは広場や世界樹、周辺の林などを見回っていたが怪しいものはなかった。戦っても戦わなくても報酬は変わらないので敵が出ないに越したことはない。

今回の夜警は楽だったな、と思っていると連絡用の携帯がピリリリと音を立てた。

通話のボタンを押すと、携帯の向こうからなにかの破壊音と詠唱の

声が聞こえ、一気に警戒態勢に入る。

「こちら世界樹広場担当、龍宮・桜咲班。どうしました」

「こちら図書館島担当、ガンドルフィー二班だ。ただ今敵の襲撃を受けている。予想以上に数が多い、救援を頼む。このままではいずれ突破されてしまう」

「了解。すぐに参ります」

ピツと電話を切り、刹那の方を見ると私に頷く。状況は把握しているようだ。

「図書館島周辺だ。急ぐぞ」

「ああ」

それだけ言うと私たちは駆け出した。

敵のいる図書館島へ向かって。

鬼、烏族、式神、多種多様な種族の連中のオンパレードだった。それを統率しているらしい術者は早々に逃走を図ったらしくすでに

現場にはいなかった。

私は自分の愛銃を二丁構えて敵を撃つ。魔術加工された銃弾は妖怪などの“魔”の類いによく効く。それを鬼に一丁五発、合計十発を撃ち込むが、流石に鬼といったところだろうか。銃弾に曝されながらもこちらに向かつてくる。だがやはりダメージはあったようで、その足取りは重い。そしてその隙を相棒が見逃すはずがなかった。

「はあああつ！」

斬。

唐竹に振り降ろされたその体躯に不釣り合いな長刀は、ほとんど抵抗なく鬼を斬り裂いた。

そのまま刹那は敵の群れへと突っ込み、それを私が援護する。

それが繰り返し行われ、やっと敵を全滅させることができた。

あちらの様子を見ると怪我もほとんどなく、敵を倒せたようだった。

今日は戦闘はないか、と思っていた所に大量の襲撃。弾を大量に消費してしまった。わりにあわん。

「すまない、助かったよ」

「いえ、気にしないでください。私たちは一応担当区域に戻ります。もう出ないと思いますけど、念のために」

もうすでに明らんできた空を眺めながら私はそう言った。

「そうかい、今回は助かったよ。また改めて礼をしよう」

そう言っただけで私たちは彼らと別れ、持ち場に戻ることにした。

刹那はこの敵は関西からの刺客かと考え込んでいる。

そんなに大事ならお嬢様の近くに居ればいいと思うが、近くに居れない理由を知っているのは私はそれを口に出さない。

そして、私も使用した弾丸の費用について考え込んでいた為に気付かなかった。

世界樹が、淡く輝いていたことに。

「な、んだ……これは」

世界樹の前に戻ってきた私たちを待ち受けていたのは、悲惨な光景だった。

確実に致死量の流れ出た血液。
貫通している腹部。
辺りに飛散した臓物類。

完璧に、確実なまでの人の死体だった。

人が死ぬ。幼い頃から戦場を駆け回っていた自分にとってそれは当たり前の光景だった。
飛ぶ頭顔。
弾ける脳漿。
はみ出る臓物。
散らばる血液。
碎ける骨。
それが普通だった。

そして人死にが普通だった私の思考は

（しまった、これで依頼失敗だ）

ということだった。

この人の死に涙するわけでもなく、守れなかったと悲嘆するわけでもなく、私がまず考えたのは自身の仕事のことだった。

当たり前のようにそう考えてしまう自分に内心苦笑してしまう。

いつから人の死に悲しむことができなくなったのだろうか、と。他人だからと言えばそれまでだが、他人だとしても一般人がこつちの事情に巻き込まれて死んだのだ。僅かな悲傷くらいあってもいいのではないか。

人死にに慣れていない刹那は吐き気を堪えながら、死んだこの人に悔やみを持つている。人が死んだ所くらい見たことがあるだろう。だが、これからいくら人の死を目の当たりにしても、彼女は人が死ぬことに慣れることはないだろう。

直感だが、そう思った。

そして、それが、何故だか眩しく感じた。

私はそんな考えを振り払うと、連絡用の携帯を取り出し、学園長室へと繋ぐ。

二回のコール音の後に、学園長は電話に出た。

「こちら世界樹広場担当、龍宮・桜咲班です」

「ふお？ 龍宮くんか、どうしたんかの？」

「世界樹にて魔帆良男子高等部の生徒と思わしき人物が死亡しているのを発見しました」

「……………なんじゃと？」

「死因はおそらく魔法による腹部貫通における、致死量の失血によるものかと思われます」

「……………そうか、巻き込んでしもうたか」

「私たちの不手際です」

「いや、君たちは図書館島の方へ加勢に行ってたのじゃろう？ 不手際は寧ろわしの方じゃ」

そう言つて電話越しにも伝わってくる悲嘆にくれる様子に、またも羨む私がいた。

学園長ほどの人も誰かの死には哀しみを見せる。

私だけ、私だけが違ふのかと思ひ知らされたようだった。

「わかった。処理はこちらの方で手配しよう」

「了解しました」

「龍宮くん、彼は何か身分証明のものを持っていないかね？」

学園長に言われて死体の上着を探すと、ポケットに生徒手帳が入っていた。

それを開いて名前を見る。

学園長に伝える為ではなく、私は小さな声でその名を読んでみた。

「魔帆良男子高等部2 - C 『北條彼方』か……………」

それが、悲惨な死に方ながら安らかな顔をして眠る青年の名だった。

暗い。

とても暗い闇が辺りを包んでいる。

さっきまでの暖かさは消え失せ、残るはこの闇のみ。

ここがあのだってやつなのだろうか。

自分が天国へ行けるほどの善人だとは思わないが、地獄へ行くほど

の悪人だとも思わない。

だからこんな何も無い所にぼくはいるのだろうか。

他に何も無い、他に誰もいない、ただただ続く闇の中に。

闇が嫌いだとは言わない。好きとも言えないが。光も同様。

これからぼくはこの死んだような世界にいらなくてはならないのか。

死。

そう、死。

ぼくは死んだんだ。

あいつの放った光の螺旋に貫かれ、重要な内臓器官を失い、血を流し過ぎて。

あの圧倒的な力によってぼくは死んだのだ。

一切の抵抗もできず。

一切の足掻きも見せず。

ただ蹴られるままに。

ただ貫かれるままに。

ぼくは“終わり”を迎えた。

そう、ぼくは終わったんだ。

なら、もうこんな所にいる必要も、意味もない。

終わりは終わり。

無へと戻るのみ。

ならこれでぼくの物語はもう終わり……………

——まだ終わりにじゃないよ

え？

——ちがうよ

声が聞こえた。

少年のような、少女のような、澄んでいて、潤んでいて、媚びていて、綺麗で、汚醜で、透明で、混合で、喜色で、悲嘆で、魅惑で、嫌悪で、理想で、現実で、秩序で、混沌で、世界のすべてを孕んだかのような声に、ぼくの時間が止まった。

——これが“始まり”なんだから

始まり？ もう終わっているというのに？

——終わりは“始まり”。始まりは始まり。終わりがあから始まりがある。始まりがあるから終わりがあから。

だとしたら、永遠に終わりなんてないんじゃないか？

——終わりは終わり。始まりも終わり。始まりは始まり。終わ
りも始まり。

もうわけがわからないよ。

——理解しない。理解できない。ただ君は受け入れることができる。
——いい。

だから、何を？

——終わりは、ただ終わりじゃなくて、始まりでもあり、続きがあるということ。

始まり……… 続き………

——そう、受け入れる。

君は……、いったい誰だ？

—— 受け入れてくれたね。

何を……

—— ここに契約は成された。

は？ 契約？

—— 君に“続き”を“始めさせて”あげる。

闇が光に包まれ、ぼくの意識を奪う直前、妖精のような少女の姿が見えた。

第一話 終わったもの同士

夢を、見た。

父と母と妹。

ぼくの家族が泣いている。

悲しみに、哀しみに。

溢れ出る涙を拭いてもせずに、ぼくに向かって泣いている。

なんで泣いてるの？

わからない。

なにが悲しいの？

わからない。

ぼくにはわからないことばかりだ。
けどただ、わかることがある。

みんなに、泣いてほしくない。

何故だろうか？

もしくはこれが普通なのだろうか？

もし、許されるのなら、その涙を止めてやりたい。

柄にもなく、“ぼく／おれ”はそう想った。

「ん……………ああ……………」

意識が覚醒していく。

草葉の匂いが鼻を攪り、日の光が目蓋の隙間からまだ明かりに慣れてない眼球を刺激する。朝露の香りが、あの日の朝を思い出させる。

目を開ける。

まず目に入ったのはたくさんの葉。まだ冬だというのに緑々しい葉であることからここが世界樹であるということが窺えた。

何故だかこの世界樹は一年中緑の葉をつけている。それも『魔法』

といった存在を知ったら理解できる。納得はできないが。

なるほど、非日常は日常のすぐ隣、ってわけか。

事実が小説より奇なり。

というより気になることがある。

何故ぼくは世界樹の、しかも天辺近くにいるんだろうか。

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

ああ、そう言えば“続き”を“始める”とかなんとか言ってたな。契約がどうこう言ってたけど、内容がまったくわからない。それくらい教えておけというんだ。

「ん？　なんだ、これ？」

仰向けになってる自分の上に見たこともない絵柄の紙が置いてあった。

それを取ってしげしげと眺めてみる。

「.....カード、か？」

なんかぼくの絵が描いてあるんだけど。
右を向いてるぼくと左を向いてるぼくが背中合わせで横向きでいる。けれどぼくの髪の色は普通より少し深い黒だ。なのに左のぼくは完

全な白髪。なんだ？ ぼくの未来でも暗示してるのか？ もしそうならばくは若白髪になるのか？ …………… まあいいか、別に。

ぼくはカードをポケットに入れると横になっていた体を起こす。

あの時と同じ明け方。

時間がほとんど経ってないのか？ 結構長い時間あそこにいたと思うんだが。

立ち上がって体の動作確認を行う。軽く屈伸して、背伸びする。

痛み——なし。

動作不良——なし。

うん、至って問題なし。

腹の傷も跡形もなく治っており、吹き飛んでいたはずの内臓も中に感じられる。

本当に生き返ったのか。

あの状態のぼくを生き返らせることができるなんてやっぱり魔法なのか？

でもなんでか、そう、感覚があの時食らった魔法と違う感じがしたんだが。

魔法なんてまったく知らないぼくが言った所で栓なきことなんだがな。どっちにしるぼくには魔法みたいなもんだし。

そんな感じで適当に納得しているともう一つ、違和感に気が付いた。

「体が……………透けてる……………」

内臓が透けて見えるんじゃない。自分を透して枝が見える。葉が見える。

なんだこれはいつからぼくの体細胞は脱色したんだ？ イメチェンか？

というか一回死んで、生き返ったと思ってたら透明になっていた。

これじゃまるで……………

「幽霊じゃねえかあああああああ—————!!」

今まで出したこともないほどの声を出して突っ込んだ。

あれから落ち着きを取り戻したぼくは、最後に見たあの少女っぽいやつに最大の恨みをこぼしながら現状の確認をした。

何しろ幽霊だ。

右も左も勝手知ったる我が学舎だが、幽霊である以上施設が使えない。

人との交流ができない。

いや、今一番気にしなくてはならないのは自分の身の安全だ。魔帆良は魔法だの悪魔だのがある世界なのだから、幽霊がいてもおかしくはない。だが、ここにいるという魔法使いは幽霊を野放しにするのだろうか？ よく物語では幽霊などは扱われるべき存在である。もしかすると自分も扱われてしまうかもしれない。まず確りと自分の立場と状況を把握せねば。

世界樹から降り（宙に浮くことができた）、辺りを散策する。

やはり人には見えてないようだ。が、魔法使いにはどうなのだろう。ぼくにとつての魔法使いのイメージとは、初めて会って殺されたあいつがデフォルトであるため、どこに魔法使いがいるかわからない今、常に完全なる警戒態勢を取っている。
サーチアンドデストロイ
見敵殲滅とかだったら目も当てられない。

用心に用心を重ねてびくびくしながら、堂々と道を歩く。隠れて歩いたんじゃ見えてるかわからないからね。

………これだけ歩いても誰にも見つからないってことは魔法使いも幽霊は視れないってことか？ いや、早計過ぎるか。一度死んだせいか警戒心が急上昇したようだ。人間不信にでもなりそうだ……
……いや、もうなってるのか。

一人一人を注意深く観察し、魔帆良の土地を歩き回る。

やはり誰も自分を見ることはできていないようだ。魔法という存在を知ってから、この学園の異常さに今更ながら気が付いた。

まず世界樹。

何故今まで疑問に思わなかったのかが不思議なほどの大樹。自分の知識の範囲では百メートルをこす大樹など唯一この世界樹のみのはずなのに、一度も書物やテレビなどで見たことも聞いたこともない。明らかにギネスに乗っていないなくてはならないだろう大樹は、世間一般に知られていないのだ。異常だ。

二つ目はロボット科学。

魔帆良で度々起こる魔帆良大学の科学研究部の造り上げる世界標準を軽く凌駕する科学力。自分で思考し、自立稼働するアンドロイド、ガイノイドをも造り上げる我が学園。魔法が関係あるかわからないが、これも異常。

三つ目、魔帆良の各武術研究会の面々。中でも、中武研こと中国武術研究会部長にて前年度のチャンピオン、『古菲』。女子中等部2-A所属、十四歳という若さで大、高、中、すべての中武研を束ねる部長である。まだ生きている時に見たことがあるのだが、あの小柄な体格で二メートル近い体格の男を十メートル以上殴り飛ばしていた。力学的にあり得ない。これもまた異常。

四つ目、図書館島。

その名の通りに島が丸ごと図書館というこれまた非常識な図書館である。

在書の数はいくら知れないが、億は超えてると思う。図書館島の地下にも書庫があるのだが、地下にはトラップ、罠があるということである階層以降は生徒立ち入り禁止となっている。………トラップってなんだと言いたい。何でも戦時中に盗まれないようにと罠を張ったらしいのだが、未だ解かれてないのだという。何もかもが異常。

最後に、三学期の始まりにこの学園に赴任してきた若干十歳の子供

先生。

労働基準法以前に、いくら飛び級で大学を出たとしてもこの国ではまだ義務教育の真っ只中だ。頭はよくても人間性が成長しきってない子供が、人に教え、導き、後押しする役目を持つ教師になるなど訴えても勝てる。先生も先生だが雇う方も異常だろう。

異常、異常、異常。まったく、今までよくここまでの異常の中でなんの違和感も疑問も持たずに生活していたのだと思うと、いかに自分が呑気だったのかが窺える。それともその違和感が認識できないようにする魔法でも使ってるのだろうか。……いや、なんでもかんでも魔法と結論付けるのはよくない。このままじゃ推理小説を読んだ時にトリックは全部魔法だと言ってしまいそうだ。

ため息が出そうなのを堪え、自分がいつの間にか学園を一通り回って世界樹の所まで戻っていることに気が付いた。とうとう自分は誰にも発見されることはなかった。安心していいのだろうか迷うな。

まあ学園ではだいたい一人でいたから別に問題はないのだが、なにかがおかしい……。あんな夢を見てしまったからだろうか。もう触れ合うことも会話することもできないが、様子だけでも見に行こうか。親は隣の県にいるけど妹は中等部女子寮に行けば会える。だが、見えないからと言って女子寮に入るのは人としてどうなのか……。

そんな無駄な葛藤をしていると、足元に一枚の紙切れが風に吹かれてやってきた。

「やれやれ、誰だポイ捨てをしたやつは」

自然を汚すなよ、とあるかないのかわからない自分の良心で紙切れを拾う。幽霊である自分でも意識をすれば物に触れることはできるらしい。人は無理だったけれど。

ぼくは拾った紙切れを暇潰し代わりに流し見て——目を見開いた。

瞳は揺れ、おそらくは瞳孔も開きつ放しだっただろう。幽霊のはずなのに汗がだくだくと流れ、体はガタガタと震える。

体の震えをなんとか抑えつけて確認するように、否定するようにぼくは紙切れの内容を読んだ。

【魔帆良新聞】

4月8日 晴天

《見習い子供先生、正式教員任命決定！》 “三学期に2ーAに教育実習生として赴任してきた子供先生ことネギ・スプリングフィールド先生が本日をもって正式な教師として任命。以前担当クラスだった2ーAを引き継ぎ、3ーAの担任に決定した。生徒からの人気も高いネギ先生は……………”

固まったまま内容のある一部分を凝視する。子供教師が正式に任命されたという所も驚愕に値するが、今はそれ以上の衝撃がぼくを襲っていた。

自分が最後に死んだ日のことを思い出す。あの日、ぼくが死んだあの日は確か、“3月4日”だったはずだ。

だが、この新聞に載っている日付は“4月8日”。

これは、そんな、まさか……………

「……………ぼくが死んだ日から一ヶ月後の日付だと？」

ぼくはまた風に曝され手から飛んでいく紙切れを呆然と見つめていた。

「もうすぐ日が暮れちゃうなあ」

夕日が傾きを見せてからもう辺りが少しずつ暗くなっていく。

歩いている人の数も少なくなつて、とうとう校舎の中には私しかいなくなつてしまう。この時間帯はいつも世界には自分一人しかいないんじゃないかと思えるほど静かで、昼間の賑やかなみんなの笑い声が聞こえなくなるだけでここまで変わるものかと思うと共にそれが寂しく感じる。

たとえ自分を誰も見ることができなくても、明るいこの学校はそれだけで楽しいんだから。

明日もまた楽しい学校であることを胸に願って、自分がいつも夜間中佇んでいるコンビニへと向かうために廊下へと出る。

もうみんな部活や友達と遊びに行ったりしていて校舎には私しかない。残っていた生徒も下校の放送が流れたのに気付いて帰り、辺りも暗くなってきたから部活動の掛け声なども聞こえなくなってきた。

校舎から出るともうすっかり日は落ちて、夜の帳が幕を張っていた。お星さまたちがキラキラ光っていてとても綺麗で少しの間見とれていた。

お星さまから目を離して、できるだけ街灯の多い道を歩いていく。いくら“幽霊”でも暗い所は怖いんです。怖いものは怖いんです。

そういうわけで夜はいつも明かりと人のいる二十四時間で開いているコンビニやファミレスで時間を潰しています。私は地縛霊なんですけど魔帆良の中までなら一応自由に行動できるんで、そこで寂しさを紛らわしています。

でも……

「友達ほしいなあ……」

私は幽霊だから誰にも見ることができません。しかも霊能者さんや払い師さんにも見ることができない影の薄い幽霊なんです。

だから地縛霊になってからの六十年間、誰にも見つかることなく一人でずっとあの席に居座ってきました。長い幽霊生活で、もう自分の生前のことはほとんど覚えていません。家族のことも、友達のことも、………自分のことも。

「友達、ほしいなあ」

満天の星空の下でお星さまに願いを掛ける。

私に友達を作る機会をください、と。

はあ、とため息を吐いてやっとなつたコンビニの入り口のすぐ横に佇む。

夜は好きじゃない。

お星さまは綺麗で好きだけど、この暗闇が、すぐ後ろから、すぐ前から、すぐ右から、すぐ左から、すぐ上から、すぐ下から、たくさん黒い手が私を掴んで、私を引き込もうとしているようで、いつもビクビクしてしまう。

成仏だって、なんで出来ないのかもわからない。

何か未練があるのか、或いはないのかどうかも分からずに六十年間、一人。

一人は、寂しい。

一人は、淋しい。

一人は、嫌だ。

一人は、嫌だ。

一人でいることに私は慣れることができない。

幽霊としても中途半端。

記憶もほとんどない。

居る意味もなく、在る意味もない。
そんな私。

これからも私は一人でいなければならないのかな？
嫌だ、そんなの嫌だよ。

誰か……私を見てよ。

「君、ぼくのこと見える？」

「……………え？」

いつの間に涙ぐんでいたのか、視界が涙で歪んで前が見えない。急いで涙を拭って前を見る。

そこにいたのは歳上の男の人でした。

魔帆良学園の制服を着た、私より頭一つ分くらい高い背。肩まで伸びた黒い黒い髪、まるで夜の闇に溶け込むような、そんな色。そして私のことを驚いたように見つめる瞳。

私はそこでようやく驚きました。

その人は、“私を見ていた”んです。

「あの……まさか、私が見えるんですか……？」

「ああ、やっぱり見えるんだ」

男の人は手のひらを目に被せて、上を見ました。

私もつられて上を見ると、そこにはさつきよりも光り輝くお星さま。一つ一つが私に勇気を与えてくれる、そんな気がした。

男の人は深く息を吐いて私を見ると、手を差し出して言いました。

「はじめまして、ぼくは北條彼方。幽霊だよ。君の名前は？」

差し出された手の意味をやっと理解した時、私は自分でもびっくりするほどの速さで両手で握っていた。

動悸が早くなつて口が上手く回らなかったけど、なんとかこれだけ言えた。

「わ、私は『相坂さよ』です！ よろしくお願いします!!」

今日は星空が、一段と綺麗に見えた。

第二話 終わりの影響

今日、終わって始まったぼくは、終わっている少女と出逢った。

ぼくなんかよりも遥か前に終わっていた少女。
終わり続けていた少女。

普通なら出逢うはずのない、終わったもの同士。
普通なら残ることのない、終わったもの同士。

世の摂理として歪んだばかり。

終わりは終わりであり、続きでも始まりでもない。

だけど。

それでも。

終わり始まり。

終わり続ける。

そんな存在が居続ける世界に。

歪み曲がった出逢いがあった。

孤独を嫌う彼女。

孤独を責うべく。

一人を拒絶する彼女。

一人を受容するべく。

闇を否定するさよ。

闇を肯定する彼方。

到底反発するであろうぼくたちは、離反することなく共に居続けた。

他人でもない。

知人でもない。

友人ではない。

親友でもない。

家族でもない。

恋人でもない。

夫婦でもない。

相棒でもない。

実際、ぼくとさよちゃんは磁極のNとSのような人間だった。

相反する。拒絶する。否定する。そんな関係。

でもぼくらは一緒にいた。居続けた。

根本的な部分が、根源的な部分が、ぼくと彼女を共に居させた。

それは二人共に一度は『終わってしまった』もの同士ということ。

終わりは寂しく、淋しく、悲しく、哀しく、悔しい。

それをぼくらは一度体験してしまっている。

ならば、ぼくらには離れることなんて出来はしないんだ。

だって、“一人になることが終わり”なのだと知ってしまったのだから。

ゆえにぼくは『終わり始まり』

ゆえにさよは『終わり続け』

相反するが為に引き寄せられるこの矛盾。

だからぼくらは共に居る。

終わりが、終わらないように。

ぼくが肉体という器から蟬の如く脱皮して早くも一晩が明けた。

夜を明かすにあたって、ぼくは世界樹を寢床にしていた。

死に場所という不吉な場所ではあるが、始まったのもこの場所だ。何かしらの情緒がある。

それに、理由は不明だが世界樹から立ち昇るこの霧っぽいやつ……

……おそらく『魔力』というやつなのかな。ぼくを殺したあいつもこんな発してたし。これを浴びてるとかなりリラックスできる。まるで温泉にでも入っているような、そんな感じ。

さよちゃんは何故か感じないらしいんだけど個人差があるのだろうか？

ああ、ここからの景色は素晴らしい、ここからなら魔帆良の都市を一望できる。

校舎は勿論、グラウンド、体育館、クラブ棟、ダビデ広場、裏山の森林や図書館島まで、その外観を拝めるのだ。

……さて、現実逃避はここまでにして自分の隣で蹲る問題について考察してみよう。

ぼくはたった今まで寝入っていたのだが、寝る前はなかったものが起きたらあったというのはどうしたものだろう？

望郷を見つめるように晴天の空を眺めていたぼくは、故郷への思いを断腸の覚悟で断ち切って、隣ですやすやという擬音を発する物体に注目した。

まっさらな粉雪の如く白い髪、絹のような手触りを連想させるそれ

を魔力の籠った葉が飾っている。

着ている服はまるで昭和を匂わせる、今の時代にはあまり見掛けない黒に統一されたセーラー。

そう、ここまで言えばわかると思う。

隣に蹲り、ぼくの腕を抱き締めるかのように……抱き締めている物体を。

その名は、相坂さよ。

昨晚出逢い、昨晚別れたはずの少女が何故かぼくの隣で寝ていた。

は？　なんでこの娘ここにいるの？

昨日はちよつと話してちゃんと別れたでしょ？

ばいばいって言ったでしょ？

つつか年頃の少女が警戒心なしに男の隣で無防備に寝るなよ。何かされたらどうするつもりだ。いや、何もしいけどさ。

六十年も幽霊してるんだから物事の分別をつけようよ。

結婚もしたことないのに父親とはこういう気分なのだろうか、と父さんの妹に対する微妙な気遣いを少しだけ察した気持ちになった。

「どうしよう、これ」

誰にも見られるはずがないとわかっていても、もし誰かに見られたら、とそう思ってしまう。

目撃された瞬間にぼくは社会的に抹殺されることになる。というより自殺になるかもしれないが。

中学生に欲情はしれないと言える人間ではないが、初めて会ったばかりの人間にぼくは欲情しない。

例えそれが見目麗しい少女だとしても。

はあ……………だからといって寝起きに可愛い少女に抱き付かれていて平気と言えるほど男は捨ててない訳で。

なんとか振りほどこうとするけどがちりホールドされており、起こさずにほどくのは無理のようだ。

ぼくは何も鬼ではない。こんな気持ち良さそうに眠る少女を無理やり起こしてまで振りほどこうとは思わない。

呑気な寝顔を惜し気もなくさらしている少女の顔から視線を外し、また空へと目を向ける。

青い空が高々と続き、白い雲が悠々と浮かび、春先の小気味良い風が頬を撫でる。

自分の記憶ではまだ三月のままだったのが、四月の命溢れる季節に上塗りされていく。三月中の間ずっと眠ってたままで、目が覚めたらいきなり四月になっていた、そんな気分だ。それは間違っていないだろうけど。

一ヶ月。

この間に自分は、自分を取り巻く環境はどうなったのかが非常に気

になる。

会話をする人はいたが、友達と呼べるかは微妙な所だ。ぼくが死んでも『ああ、そうなんだ』くらいの感傷だと思う。

問題はぼくの家族だ。

祖父母はどちらも亡くなっていて、親戚類もない。いや、いるかもしれないけど面識はないのでいないと同意義だろう。

問題は家族と言ったが、家族と言ってもぼくはこのような性格な為、あまり馴染んでいたとは言にくい。

疎まれてはいなかっただろうが、仲が良いとは言えなかった。

だから父さんと母さんはいい。ぼくが死んだことに涙するかもしれないが、立ち直りは早いだろう。

なら何が問題か。

そう、妹だ。

妹だけはぼくにずっと付きまとっていた。

赤ん坊の頃からぼくが傍にいないと泣き喚き、ハイハイを会得して行動が可能になるとぼくの後をひっきりなしにつけ回した。

幼稚園にぼくが通い出してから家は家を抜け出して幼稚園にまでぼくを追いかけてきた。こんなことが二度となないように妹はぼくと一緒に幼稚園へ行くことになった。

ぼくが小学生にもなるとそうもいなくなる。

いくら駄々をこねても一緒のクラスなどはあり得ない。ぼくが七歳

で小学校一年生の時、妹は四歳で幼稚園の椿組だったのだから。だからか、家に帰ると妹のじゃれつきが何倍にもなっていた。食事の時はぼくの膝の上、お風呂に入る時も一緒に入浴、寝る時も同じ布団で就寝。

当然の如く、学校がぼくにとって安らぎの場となったのは言うまでもない。

しかし妹が小学生になっても上記は改善されず、むしろ学校でも一緒にいるようになってしまい、ぼくが中学三年生、妹が小学校六年生になるまでそれが続いた。

高校を魔帆良に選んだのは妹と離れられる為……………ではない。

過剰とは言え、ぼくを慕ってくれる妹を、ぼくは愛していた。無論、家族してだが。

ぼくが魔帆良に来た理由は追々話すとして、とにかくぼくは魔帆良へとやって来た。勿論、妹も共に。

ぼく自身が魔帆良に行くことは許しても、妹が付いていくことには両親も反対したが、妹を溺愛している両親だ。妹の決意に勝てるわけもなく、魔帆良中等部へと入学を果たした。

寮の門限もあるし、もともと校舎が違うので会える時間はあまりなかったが、下校時刻から門限までは二人で一緒にいた。

ここまでされて気付かないわけがないのだが、妹はぼくに依存していた。

何が妹をそうしたのか知らないが、完全に、質の悪い麻薬よりも完璧に、妹の身体をぼくは蝕んでいた。

そんなぼくが。

妹の薬のようなぼくが、一ヶ月前に死んだ。死んだのだ。いなくなってしまったんだ。

今、妹がどんな状況なのかはわからない。

だから心配する。妹の安否を。

これでもぼくは兄なのだ。

あの子の、兄なのだから。

「うう~~~~ん」

どうやら眠り姫のお目覚めのようだ。

さよちゃんは射し込む光を眩しそうに半目で防ぎ、寝起きで乾いている瞳をしばしばさせる。

まだ寝ぼけているのか、ぼくの腕を離すようなことはせずに片手でホールドし、器用に目を擦っていた。

十秒くらい、彼女はボツとしていたが、やっと脳が起動を再開し始めたらしい。

「きゃわわわわわ~~~~~!!!!」

ブンっという音と共に放り投げられるぼくの腕。

もちろん、その腕と繋がっているぼくはおもいつきり引つ張られ、二人でギリギリだった枝の上からはみ出してしまった。

「……………っ!!」

叫びそうになったが、声が出なかった。

あまりにも予想外。

ここまでのサプライズは初めてだ。

心臓が役割を放棄する所だった。

と、そこで自分が幽霊だったことに気付く。

宙に浮かんだり、物体をすり抜けたりっていうのは意外と意識しないといけない。（人には触れられないけれど物を動かすことができた時に、これがポルターガイストなのかと勝手に納得した。）

加速し始めた身体を意思で浮かす。

落下が止まった時、やっと一息吐くことができた。

幽霊になった所でまだ人間の感覚のままのぼくには幽霊の勝手は分かりづらい。慣れるまでの辛抱か。

なんとか浮遊を制御して上まで上がっていく。一晩中この魔力に包まれていたせいか、急に速度が上がったりしたがギリギリでたどり

着くことができた。

さよちゃんは涙目のままおろおろしてたけど、浮かんできたぼくを見つけると、これでもかっというくらい頭を深く下げて謝罪した。

「す、すみませんでした！ その、私寝ぼけてて……」

「いや、いいよ。気にしてない。それよりもぼくはなんで君がここに
いるのかを知りたいんだけど」

ぼくの質問に顔をトマトのように真っ赤にしてうつむかせるさよちゃん。

……… なにか答えづらいことを聞いたか？

「えっと、……… ですね、実は………」

「ん？ ごめん、聞こえなかったからもう一回言ってくれない？」

「で、ですから………」

小刻みに震えながらトマトのようだと表現した顔がさらに赤みを深めた。

思わず救急車を呼び掛けそうになったが、さよちゃんが口を開いたのでそのか細い声を聞く為に神経を集中させた。

「ですから、.....

.....寂しかったんです」

「.....はあ」

「もし嫌われたらと思われたらどうしようって考えてたら、言い出せなくて.....言おう言おうと思ってたらもう彼方さんは寝ちゃってて.....黙って隣で寝てすみませんでした」

「いや、別に怒ってないから。ずっと一人でいたんだもんね、わかるとは言わないけど理解はできるよ」

要するに怖い夢を見て一人では眠れなくなった子供みたいな感じか。.....え？ 違う？ 意外と的は得てると思うんだけど。

恐縮しまくってる彼女がなんか不憫だな。

怒ってないって言うてるのにシユンとしたまんまにいるさよちゃん
は小動物チックで、その手の人が見たら即お持ち帰りされてしまう
くらいのオーラを放っていた。

「いや、本当に怒ってないから。ただ一言言っただけさよちゃん
さよちゃんの気遣いもわかるけど、まず年頃の女の子が男と夜を越
すってのがよくないから」

「.....はい、今度からは気をつけます」

今度？ その言葉を聞き流してゆっくりと立ち上がる。幽霊になっ

ても重力による圧迫感が感じられる。これもまた慣れか、と今は諦めて世界樹から下を見下ろす。

今日の予定はもう決まってる。

幼い頃から無邪気に、時に邪気有りにばくに付いて回った妹の様子を見に行こうと。

自分がいなくなってからへこんでないか確かめに行こうと。

行った所でもう終わってしまった自分には何も出来はしないが、それでも一目見ておきたい。

学園の生徒たちがケーキに群がる蟻のように群集をなして校舎へと向かって行くのが見える。

ぼくはこの群れに紛れるのが嫌だったのでこの時間には登校済みだったのを思い出す。

「あ、そう言えばさよちゃんはいいの？」

「はい？ 何がですか？」

「いや、いつも学校の時間は教室にいてって言ってたからさ。今日には行かなくてもいいの？」

「！ そ、そうでした！」

「幽霊になったのに律儀だねえ。ホントまんまに試験も何にもないのに。クラスまで送って行こうか？ どうせ見えないし」

「むう。私はそこまでドジじゃありません！　一人で大丈夫です！」

やれやれ、拗ねられてしまった。

さつきからしよぼくれだり拗ねたりと忙しい娘だな。

年相応と言えばそうなんだろうけど………幽霊になって六十年でしよ、さよちゃん。

それとも幽霊になると精神は成長しなくなるのか？　それならさよちゃんは永遠の十四歳を地で行けるな。はっ！　ってことはぼくも永遠の十七歳か！

せめて二十五くらいで止まって欲しかったなあ。そこまでが普通の成長域だし。

おっと、こんなことを考えてる場合じゃない。

この拗ねてフグみたいに膨らんださよちゃんの機嫌を取らないと。

「じゃあ授業が終わったら迎えに行くよ。さよちゃんのクラスは何組？」

「そうですか？　へへへ……」

年頃な少女の思考なんてよくわからないが、何とか機嫌は直してもらえたようだ。

先程とはうって変わって上機嫌になったさよちゃんは鼻唄を刻みながらぼくに告げた。

「私のクラスは女子中等部の3ーAです」

「え？」

3ーA？ 確か中等部は一年から三年までクラスは変わらないんだ
つたよな。

ぼくの妹は中等部の“2ーA”だった。

そして今はぼくの死んだ三月から“一ヶ月後”……………

「さよちゃん」

「は、はい」

「君、『北條京狐』って娘を知ってる？」

さよちゃんは予想外のことをいきなり言われて少し惚けていた。無意識で焦っていたのかぼくはさよちゃんの肩を掴んで視線を固定した。

「さよちゃんは、北條京狐を、知ってる？」

「北條………まさか！ 京狐さんの亡くなったお兄さんって……」

『北條さんの亡くなったお兄さん』

それを聞いて確信した。

彼女が京狐のことを知っていると。

そしてさよちゃんの見せた表情から、焦燥とも言える何かを、確かに感じた。

「京狐は、妹は、どうしてるんだ？」

言いづらそうにさよちゃんは目線を反らす。

が、震える唇でなんとかその音を伝えた。

「京狐さんは……………お兄さんが亡くなった一週間ぐらい後に……………自殺を図って病院に入院しています」

世界樹が、僅かに軋んだ。

第三話 恋する乙女（前書き）

原作キャラ崩壊の恐れあり。百合あり。要注意。

第三話 恋する乙女

歯車がぐるぐるぐるぐる。

ありきたりな意見ながら、世界とはそういう構成をしているのだと思っていた。

一人一人が、一つ一つが、噛み合わさって起動することのできる巨大なカラクリ。

もちろん、それぞれの体する歯車の大きさは違う。

世界の三割近くを占める大きい歯車もあれば、小数点下二十桁程度のパーセントしか持たない歯車もある。

空間とはそれを仕舞い込む為の入れ物に過ぎず、ぼくたちはその中でせつせと世界を運営させる為の一部品。

上の空論から言うとはくも歯車の一つであり、世界を稼働させている一員であるはずだが、実際はそんなことはない。

東洋のこんなちっぽけな島の住人が一人死んだだけで世界がどうにかなるなんてあるはずがなく、無論、世界の稼働が停止することなどあり得ない。

つまり所、世界にとって、ぼくは居ようが居まいが関係のない部品ということとなる。

所詮、ぼくみたいな一般人が一人死んだからって別段変わるわけがないのだ。

目に見えないくらいの小さな歯車が一つ欠けた所で影響など出ないと、高をくくっていたぼくは——救いようのない馬鹿だった。

その考えは大局の見方であり
傍観者の考えであり
不干涉者の意義であるのに

歯車が欠けて一番影響が出るのは二つ隣の歯車ではなく、すぐ隣の歯車だというのに、ぼくは何を考えていたのだろう。

どんな小さい歯車だろうが欠けたら影響を及ぼす。

全体から見たら影響なんて感じないだろうが、隣接する区域から見ればそれは多大なモノなのだから。

今日、ぼくはまた一つ、過ちを犯した。

魔帆良大学病院

室番203号

療養者 北條京狐

清潔さをイメージさせる純白の病室。

簡易なベッドと延命器機しかないその病室に、ピッ、ピッ、という安定した機質音が鳴っている。

ベッドの上で安らかな寝顔を見せる彼女はまるで童話の中の眠り姫のよう。

……………いいえ、この場合は毒林檎を食べさせられて眠る白雪姫と言った方が適切ですね。

彼女のお兄さんの死が、その毒林檎だったわけですが。

くっ、と憎々しいという感情が私の内から溢れ出してくる。

京狐さんがこうなってしまった原因に対しての憎悪は一ヶ月経った今でも薄れることはなく、ただ蓄積されていった。

一ヶ月前の事故。

世界樹の根元で見つかった高等部男子生徒の遺体。

死因は、心臓麻痺。

冬の夜中に学生寮を抜け出して学園を散歩している最中に掛かり、世界樹根元で絶命していたのを朝練に出ていたクラブの生徒に発見されたらしい。

死亡推定時刻は明け方の五時三十分から六時の間ということ。

死体の状態から言って、学生寮の外に出たのは約二時から三時。死亡推定時刻までの約二時間から三時間を外でふらついていたということになるです。

ホント、どうかしていたのではないか、と本気で思います。

確かに予測できない急死だったのでしょう。

予想などしてもいかなかったのでしょうか。

だけど、もし寮を抜け出してなかったら助かる可能性もあったはずなのです。

各部屋にある異常用のベルや、内線。誰かに助けを呼べる可能性があったのに、彼はあろうことが寮を抜け出し悠々と散歩していたというではないですか。

自業自得。因果応報。

彼が死んだのはある意味自身のせいです。

ですから彼が亡くなったことに対して私は口出しをするつもりはありませんでした。

ですが、やはり口を出させてもらいます。

北條京狐。

亡くなった彼の妹であり、私の親友である彼女。

穏やかで、強かで、美しく、雅で、そして……………優しい少女。

中学生になった時、1ーAに新たに加わった生徒。

奇しくも私の席の隣になった彼女。

『初めまして、今日からよろしく願いしますね』

初めて会ったあの日、確かに私を彼女に魅了させていました。
同性を相手に赤面して、言葉がうまく発音できずに声を濁して返事
をしてしまい、さらに赤くなって俯く私。

そんな私に彼女は……

『ふふふふ……………』

と優しく微笑み掛けてくれました。私は自分でも人付き合いは得意
とは言い難い種類の人間だと理解しています。

この話し方、態度、雰囲気、コミュニケーションには向いてない
ことも知ってますが、彼女はそんなことを気にせず、いえ、それを
含めて受け入れてくれました。

私の親友とも言えるのどかやハルナもそんな私を受け入れてくれますが、初めからというわけではありませんでした。それが悪いのだということではありません。

そのお陰で私はのどか達と友情を結べたのですから。

ですから、これをどう表現すればいいのか解りません。

ただ、彼女は今まで出会ってきた誰よりも、私の裡に残ったというだけの話。

彼女とはこの二年間で喧嘩したこともありました。

実は、私は……いえ、他の誰もが彼女と遊んだことがなく、一緒に下校もしたことがないです。

いつも彼女は学校が終わると同時に一番に教室から出て行き、ある場所へと向かいます。

もちろんそんな不審な行動の彼女を見逃すパパラッチ朝倉さんではなく、野次馬根性丸出しのみんなを焚き付けて後をつけてみたことがあります。

彼女が向かった先は魔帆良男子高等部。

後ろのクラスメイトたちは彼氏、彼氏などと騒いでいますが、それを何故か私は不愉快に感じました。

彼女に限って、京狐さんに限ってそんなことはない、と。

まるで我が儘な子供に言い聞かせるように。

彼女は校門の所で誰かを待っているようで、下校する人たちの中から

ら誰かを探していました。

京狐さんのその容姿から、当然の如く注目を浴び、何人かに声を掛けられてましたが、丁寧じゃんわりと問題なく断っていました。

その時に言う言葉が……

『兄を待つてるので』

この一言で言い寄っていた男は大抵引き下がっていきます。

後ろではガツカリしたような声で溢れるクラスメイト、そして、どこかホッとしている私が居たです。

それは彼女が待っているという人物が恋人ではないとわかったからなのか、親友を取られずに済んだという思いからの安堵なのか。私には判断できませんでした。

でもホッとしたのは確かで、その事実には私は赤面してしまい、みんなから変な目で見られてしまいました。

だけどその安堵はすぐに微塵もなく破壊されることになる。

『なんだ京狐、また来たのか』

現れたのはどこにもいそうな平々凡々な容姿をした男子生徒。

特徴などほとんどなく、人混みに紛れたら即見失ってしまいそうな人物。

『兄様！！』

京狐さんがそう呼ぶまで、彼がどの誰かなんて気が付きもしなかった。

それほど彼には京狐さんとの共通点が見当たらなかった。

唯一上げるとしたらその髪の色だろうか。

京狐さんの艶のある髪とは違い、艶もなにもあったものではないが、ただただ黒い髪。

無理やり闇色で染め上げたような黒に、背筋がゾクリと粟立つのをかすかに感じました。

ただど今はそれよりも強大な衝撃が私の中で反芻して、まともな思考が停止してしまいました。

『遅いじゃないですか兄様』

そんな言葉を掛ける京狐さんの顔が、敬愛する兄に向けるソレではなく、明らかに異性の男子に向ける恋慕の表情で、彼に抱き着いていたのですから。

彼の方は抱き着かれるのを鬱陶しそうにするだけで何も言わずに京狐さんを見つめるだけ。

京狐さんはそんな彼の反応の何が嬉しいのか、さらにきつく抱き締

めました。

私が見たこともない彼女の女としての姿。

それが何故かショックで、後ろでキヤーキヤー騒いでるみんなの声も私の中を素通りしていきました。

気が付けば二人は……… というより京狐さんが一方的に彼の腕を抱き締めるように組み、今まで見たこともないくらいの幸せそうな表情を周囲に振り撒いて歩いて行ってしまうした。

クラスみんなは後をつけて行ってしまったけれど、私はまるで熱に浮かされたみたいにフラフラと女子寮へと帰りました。

その後のことはよく憶えてはいませんが、同室のハルナとのどかが心配そうにしていたのだけが印象に残っていました。

記憶の泉から意識が引き戻される。

あのあとのことは思い出したくない。

翌日に私が京狐さんを遊びに誘い、当然の如く『兄に会うから』と断られ、感情が制御できなくなつて泣きながら子供のように逆ギレしてしまったのは私の人生の中でもワースト3に入る出来事です。

嫌でも頭に思い浮かぶあの自分の曝した醜態に今もまだ身悶えしそうになる。

そんな醜態を曝しても結局京狐さんは私を宥めた後、いつもと変わらず彼に会いに行ったのだから。

その時に気付きました。

どう足掻いても京狐さんの中での優先順位は彼が一番で、それ以外のことは全部“それ以外”だと。

彼女の中ではすべてのことが一位と最下位にしか別けられていないと、理解してしまったから。

この事実気付いた時にはもう自分の気持ちに整理がついていた。

私は、『綾瀬夕映』は、北條京狐のことが、好きなのだと。

女性に恋をする女性。

まるで他人事のように、自分のことをそう認識した。

不思議とそのこと自体にはあまり衝撃を受けなかったのが意外でした。

この事実気付いた時にはもう自分の気持ちに整理がついていた。

認識してしまえば自分の感情の制御は簡単で、この気持ちを胸の奥に隠して生活を送ることができた、と思う。ときどきパルに『ん？ほのかにラブ臭がするな』とか言ってたですが、気付かれてはいないはず。

京狐さんと二年間、過ごしたうちに私の気持ちは小さくなることは

なく、さらに想いは募っていました。

だから、嬉しかった。

彼が亡くなったと聞いた時、私はただ、嬉しかった。

今まで何かに呪われてるように兄を盲信する京狐さんが解放されると。

……………いえ、誤魔化すのは辞めにするです。

彼が亡くなって、京狐さんが兄だけではなく、私たち……………私を見てくれるのではないかと淡い期待を懷いてしまったのです。

京狐さんの心を独り占めしている癖にそれを当然だと扱う彼が死んで、喜んでしまったです。

だけど結果はこの通り。

彼女にとって世界とは彼そのものであり、彼とは世界そのものだった。

悔しかった。

彼女にとって、何でもない自分が。

憎みに憎んだ。

彼女にとって、全てである彼を。

彼女が手首を切った聞いた瞬間、私は意識を失いそうになった。
担任のネギ先生も顔を蒼白で今にも倒れそうにふらついていました
つけ。

彼女の面会謝絶が解除されたのは、京狐さんが自殺を決行してから
四週間後のことでした。

傷はもうほとんど癒えているとのことですが、未だ意識を取り戻さ
ないのは精神の方に問題があるとのことらしいです。

彼女は否定してるのでしよう。

彼のいない現実を。

だから目を醒まさない。

黒く長い艶やかな髪。

白く陶磁器の肌。

紅く朱い唇。

同性すら虜にしてしまう魅力。

本当にお姫さまのようなその寝顔には何人も魅了する魔力を放って
いた。なんびと

そう言えば、と思い出す。

眠りの呪いはキスによって解かれるものだ。

安らかに眠る彼女の寝顔に自分の顔を近付ける。

近くで見れば見るほどにお人形のように整った顔。

顔が紅潮する。

動悸が高鳴る。

身体が疼く。

そのまま私は顔を近付け……

唇と唇が重なった。

甘い味が広がる。これが、京狐さんの味。

十……二十……三十秒、いいもつとでしょうか。

口を重ねてそれくらいの時間が流れ、そして………彼女の目を開くことはなかった。

「そうでしょうね……」

眠ったままの彼女は、やはり眠ったまま、反応の一つも返してはくれなかったのだから。

だって、呪いに侵され、眠り続ける姫の眠りを醒ますのはいつも――

「王子様のキスですからね……………」

眠り続ける彼女のシーツを掛け直して背を向ける。

鞆を手にとって扉に手を掛け、最後に一度だけ眠ったままの姫に咳いく。

「起きたら、私をちゃんと見てくださいね」

自分でも解るほど歪んだ笑みでそう言った。

魔帆良大学病院。

魔帆良都市の中部にある人並み外れた大病院。学園で対処できない怪我や、病気になった際に生徒が利用できるように、魔帆良大学の医学部の研修、研究の為に魔帆良学園と共に設立された歴史ある病院であり、生徒は生徒手帳を見せることで医療費が最大半額になる

生徒に優しい病院である（場合により学園が負担）。
真っ白な塗料で全体を覆った健全を目標とする建物の前でぼくは佇んでいた。

隣には心配そうな表情でぼくを見つめるさよちゃん。

わざわざ学校をサボってまで付き合ってくれている。ぼくは一人で大丈夫だと言ったんだけど『いいえ、私も行きます！』と断固譲ろうとしなかった。世話焼きな娘だと改めて認識する。いい娘だなあ。

さよちゃんから視線を外して病院へと向け、歩み出す。

ウィーン、というよく耳にする自動ドアの開閉音が聞こえる。

まだ春といっても四月の上旬であるためか、院内の暖房の温い風が自分の身を撫でる。

霊体となった今、その温度の変化などちょっとした違和感しか感じる事ができないのが自分は死んだ身なのだと再認識させる。

現在だって生活は野宿だが、至って苦はない。

夜の寒さも感じないし、陽の温もりも感じない。感じたとしてもそれは自分が人だった頃の神経が見せる誤感覚。寂しいと言えば寂しい。今まであったものが、実はかけがえのないものだと気付く。いつになっても人はそれを初めに認識しない。後で悔やむから『後悔』ね。これほどピッタリな言葉もないだろう。

最近癖になりつつある自嘲を意識して止め、目的の場所に向かい出す。

さよちゃんが案内するようにぼくよりも一歩先に出て前を歩く。事実、ぼくは京狐の病室は知らないのです、彼女の揺れる長い白髪を横目で眺めつつ殺風景な廊下についていった。

しばらく歩いて二階へ向かうのか階段に差し掛かった時、ぼくたちとすれ違った小さな人影があった。

ぼくはなぜか自然とその姿を目で追っていた。

すれ違った為、顔は見れなかったが後ろから見た彼女は小柄で、長い髪を三つ編みでまとめていた。制服を見たところ、魔帆良女子の中等部ということがわかったが、なぜかぼくは彼女から目を離すことができなかった。

そんなぼくを見て、さよちゃんは何か思い当たるように言った。

「あれ……………今のつて綾瀬さんじゃないですか？」

「……………さよちゃんの知り合い？」

「一方的に知ってるだけですけど……………クラスメイトです」

さよちゃんとクラスメイト……………。ということは京狐とも一緒にクラスということになるのか。

「でも綾瀬さんがいたということは綾瀬さんも京狐さんのお見舞いに来てたんでしょうか？」

「……………たぶんね。本当、うちの妹はいい友人を持ってるな」

嫌な感覚が自身を這いずり回る。
なんだこれは。

蛇が巻き付いているような、蟻が全身を這っているような、例えようのないこの感覚。つい最近どこかで似たような感覚を体験したような気がしたが、思い出せない。

「じゃあ行きましょうか。もうすぐ着きますから」

それだけ言つとさよちゃんは前を見て進み出す。遅れないようにぼくも後を追うけど、病室で妹に再開するまで、その感覚に苛まれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5146g/>

終わりに続く始まり

2010年10月8日12時11分発行